

「良きサヴァイヴァルに向けて」

——グローバル化のなかでの 実践的ネットワークの構築——

——港道隆教授 追悼特集号に寄せて——

人間科学研究所長

川田 都樹子

はじめに

去る平成二七年三月五日に港道隆教授が永眠されました。私たち甲南大学にとって、また思想界全体にとっても、あまりにも惜しい方を失うこととなりました。

港道教授は、当人間科学研究所の平成一四年の創設の起点からご尽力され、臨床心理学、医学という臨床実践を担う学問と哲学、倫理学を含む人文・社会諸科学とが連携し、現代人の心の危機に関する研究プロジェクトの協同研究に取り組むという他に類を見ない体制の基盤を創り上げ支えてこられました。平成二二年四月一日から、ご体調を崩される平成二五年九月三〇日まで人間科学研究所長を務められ、文字通りこの共同研究の

リーダーとして私たちを導いて下さいました。

平成二五年より研究プロジェクトとして研究所が取り組んで参りました「良きサヴァイヴァルに向けて——グローバル化のなかでの実践的ネットワークの構築」は、港道教授が中心となつて立案されたものです。港道隆教授追悼特集号として本号ではその概要をまとめ、研究成果報告の一環としての投稿論文を掲載することになりました。

そこで、以下、プロジェクトの概要を、港道教授が立案された際に書かれたままに掲載し、港道教授を記念するとともに、跡を継ぐべき私たちが目指そうとする方向を確認し、決意を新たにする礎にしたいと思います。

本研究プロジェクトの目的と意義

高度成長が終焉し超高齢化社会を迎えながら、国際的にはグローバル化の浸透が、大規模災害とあいまって様々な不安を生み、その対抗策としてオルター・グローバル化の試みがなされている。そのなかで臨床心理と芸術による実践的ネットワーク構築を図り、地域における寄与を具体化する。本学の教育へとフィールドバックし思想・環境・芸術教育へと反映させる。また、臨床心理士資格第一種指定を早くから受けた人間科学専攻における専門家養成と、甲南大学カウンセリン

グセセンター（心理臨床カウンセリングルームと学生相談室）での臨床活動を一層充実させる。

これまで形成してきた理論面・実践面でのネットワークをさらに強化・拡大し、地域での連携をさらに充実させる。

研究プロジェクトの概要

「サヴァイヴアル」「主体形成」「危機」をキーワードに新たな問題設定を行なう

△三つのテーマ▽

1 「ライフヒストリーと記憶のあり方を核にした理論的・実践的研究」

2 「主体表象の危機と感性的経験の現在」

3 「グローバル化とローカルな共同性の民主的再興」

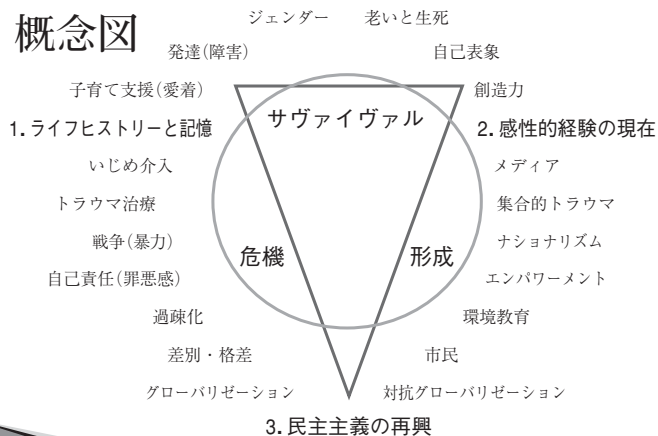
― 1、ライフヒストリーと記憶のあり方を核にした理論的・

実践的研究

阪神地区において子ども時代に太平洋戦争を経験した人々の意識調査と疎開体験調査。それをもとに心理学的分析と歴史学的分析を行なう（地域の学童疎開史料集を編纂）。

トラウマ的記憶の整理を行う心理療法実践研究を並行して行い、両者の相互刺激を図る。

概念図



6

一五年間におよぶ父親の子育てに関する研究や、親子の愛着形成をめぐる研究を深める。

(1) 心理療法における記憶のアプローチ

- (a) NET (Narrative Exposure Therapy)
- (b) 身体志向アプローチ
- (c) 認知行動的アプローチ

(2) 子ども時代、子育て体験に関する研究

- (a) COS (安全感の輪) プログラム、子育て応援講座
(養育者対象)
- (b) 父親の子育て支援
- (c) 学校適応支援

(3) 子ども時代の戦争体験の研究

- (a) 心理学的観点ITT
- (b) 歴史的観点、史料集の発行

― 2、主体表象の危機と感性的経験の現在

本研究所において実施されてきたプロジェクト「芸術学と芸術療法の共有基盤確立に向けた学際的研究」の成果を引き継ぐ。心理臨床領域の研究者と芸術学研究者との学際的な共同を進めながら、芸術創造行為における自己像の変化へと問題点を明確化する。

(1) 芸術史および芸術理論の方法論としての自己像の再考。

芸術制作者の自伝的過去が作品創造のプロセスの中でどのように変容するか、近代美術・文学および音楽の事例を比較検討。

(2) 臨床心理学上の支援の一側面としての自己表象

精神科病院の精神病患者や認知症患者を対象に、コラージュ療法とソフトペーパークラフトを実践して表情解析を行いデータを収集

(3) メディア環境の変容を読み解く視点としての自己感

メディアや主体的な参加を求める作品形態の浸透によって、制作・鑑賞行為の内で自己を経験する意味そのものが変化している状況を考察

― 3、グローバル化とローカルな共同性の民主的再興

政治・経済のグローバル化が生む否定的効果を検証し、世界各地に広がるオルター・グローバル化の運動、ローカルな生活圏の再編を考察する。

臨床実践と芸術活動、および歴史研究を統一的に「技芸」(アート)として捉えて、地方共同体のサヴァイヴァルへの支援と支援の視点からの理論的問題点の抽出を試みる。

心理療法が巻き込まれている世界的なグローバル化の動向を分析する。

(オルター・) グローバリゼーション時代における新たな民主化の可能性を、歴史学および思想的に考察する。

(1) ローカルなものの再構築に向けて

臨床心理による過疎地医療の支援を通して、歴史学、芸術に連携の可能性を模索

(2) 心理療法の国際的環境変化とその地政学的力動の分析を行う。

フランスで起こった精神分析バッシングに注目し、心理療法のエヴィデンス主義によるグローバル化に働いている諸々の力を理論的に吟味する。

(3) 来るべき民主主義の可能性を探る。

アメリカ民主主義を浮き上がらせた上で、国内的、国際的を問わず、新たな民主化の可能な様態を模索する。

付記

以上は、港道教授が本研究プロジェクトに関する学内での概要説明のために作成されたものです。外部資金獲得が困難な状況にあつて、上記の主旨説明にある内容の一部は未だ十全には果たせぬままになっていること、しかしまた、この研究プロジェクトは、本号のみならずこれまでに開催されてきた公開研究会、公開シンポジウム、あるいは過去に刊行された紀要や報告書の中でも、また、各研究員の学内外での個々の研究報告の中にも、その成果を残してきたものであることを付言させていただきます。人間科学研究所は港道教授のご遺志を継ぎ、今後も複数の専門領域間の連携を深めつつ、現代社会の諸問題、特に現代人の心の問題に多角的・総合的に取り組んでまいりたいと思います。

なお、港道隆教授のご経歴・ご業績に関しましては、本誌と同時期に発行される甲南大学文学部紀要第一六五号に掲載されますので、合わせてご覧いただけましたら幸いです。

(かわた ときこ)